

農林水産大臣賞受賞

年間来訪者 3 万人以上！
～全国に先駆けたオーナー制度など、都市農村交流を通じた地域活性～

とくていひ え いり かつどうほうじんおおやませんまい だ ほぞんかい
受賞者 特定非営利活動法人大山千枚田保存会

かもがわし
(千葉県鴨川市)

■ 地域の沿革と概要

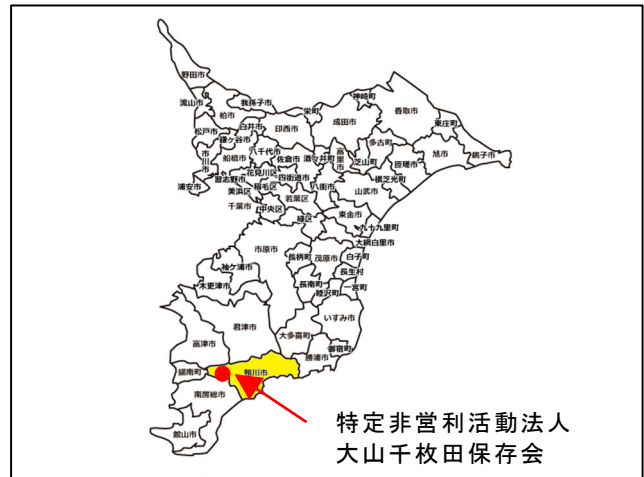
鴨川市は千葉県南東部に位置し、
県庁所在地である千葉市からは約
50km、東京都心からは約 80km の距
離にあり平成 17 年 2 月に、旧鴨川
市と旧天津小湊町あまつこみなとまちの合併により、現
在の鴨川市となった。

太平洋（外房）に面し、年間を通
して温暖な気候であり、「長狭米」
など知名度が高く品質の優れた農産
物が生産されている。自然の豊かさ
は勿論のこと、日蓮宗の大本山であ
る誕生寺や源頼朝ゆかりの仁右衛門
島にえもんじまなど歴史に裏づけされた名勝や旧
跡といった文化資源や、全国的に有
名な海洋テーマパークである鴨川シ
ーワールドなど、数多くの観光スポ
ットにより、多くの観光客を迎える
観光地でもある。

大山千枚田がある市西部の旧大山
村きよすみ みねおかは、清澄山系と嶺岡山系の山間地
及び丘陵地が大部分を占め、平坦地
は比較的少ないが、山間丘陵地に挟
まれるように長狭平野が開けており
、棚田の景観でも有名な風光明媚で
のどかな地区である。

旧大山村の令和 2 年の世帯数は 526

第 1 図 位置図



第 1 表 地区の概要

事項	内容
地区の規模	大字単位の集団等
地区の性格	機能的な集団等
農家率 (内訳)	34.0%
	総世帯数 488戸
	総農家数 166戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 33戸
	1種兼業農家 6戸
	2種兼業農家 71戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 2,114ha
	耕地面積 108ha
	田 95ha
	畑 13ha
	耕地率 5.1%
	農家一戸当たり耕地面積 0.7ha

注：鴨川市旧大山村の数値（H27）

専業別農家数は販売農家数の内数のため、総農家数と一致しない。

戸、人口は1,137人であり、20年間で世帯数は微増、人口は約3割減少している。

大山千枚田保存会が管理する「大山千枚田」は、千葉県最高峰の愛宕山あたごやまの麓にあり、都心から車で2時間弱と、「東京から一番近い棚田」として有名で、約3.2haの急傾斜地に375枚の田が階段状に並んでいる。ため池や用水路等の水利施設がなく、降雨だけで耕作している全国的にも珍しい棚田であり、平成11年に「日本の棚田百選」、平成14年に「千葉県指定名勝」に選ばれている。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

大山千枚田保存会は、「東京から一番近い棚田」として有名な「大山千枚田（棚田）」を核として、年間自然豊かな里山の環境保全と、棚田オーナー制度や酒づくりオーナー制度、大豆畑オーナー制度などの取組により、都市との交流を通じた豊かで潤いのある地域社会づくりに向けた幅広い活動を行っている。

また、家づくり体験塾では、古民家の再生を通じて日本の伝統建築と国内産の木材の価値を見直し、森林の再生に寄与するために地元林業家、地元大工と連携した活動を展開している。

さらに、古民家レストラン「ごんべい」において、地元農産物を利用したメニューの提供や農産物加工品の販売を行うことにより、所得の拡大と女性の雇用にもつなげている。

こうした各種の取組により、地域内に向けては人づくりと地域づくりを、地域外に向けては農村の持つ様々な役割の伝承や、農業や地域のことを理解し支援してくれる人の増加、都市と農村の相互支援と地域内の活性化につなげている。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

大山千枚田の特徴から生産条件が不利であること等の理由で、以前から住民の高齢化、担い手の不足、耕作放棄地の増加が顕著であった。

そのような状況において、鴨川市が、都市と農村の交流による農村環境の保全と地域の振興を目的として、「鴨川市リフレッシュ事業構想」をまとめたことをきっかけに、大山地区で、地主、地元住民、市の間で、地域の課題を解決するための都市農村交流の活用について協議が進み、都市農村交流を実践する組織として、平成9年度に本保存会を設立した。

地域住民は、それぞれの得意分野で地域に貢献するため、体験インストラクターや、直営する農家レストランスタッフ等、様々な分野で

活動に参加するとともに、全国に先駆けた「棚田オーナー制度」等により、都市住民の力を借り、交流、共生を進めながら、耕作放棄地の解消、景観の整備など、地域の課題解決を図っている。

「大山千枚田（棚田）」を核として、年間を通して自然豊かな里山の環境保全と、都市との交流を通じた豊かで潤いのある地域社会づくりに向けた幅広い活動を展開している。

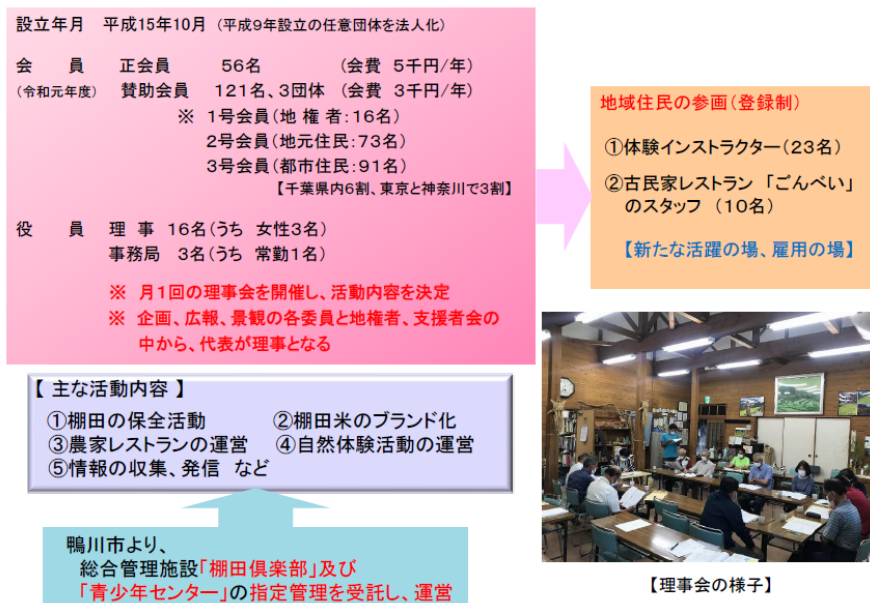
（２）むらづくりの推進体制

保存会員として正会員 56 名、賛助会員 121 名、団体会員 3 団体の会員を有しており、総会発議権のある正会員の中から理事 16 名、監査役 2 名を選出し、毎月の理事会の中で活動方針を決めている。事務局は常勤 1 名、非常勤 2 名を職員として雇用し運営を行っている。

また、棚田オーナー制度に代表される都市農村交流イベント開催時の体験インストラクターや昼食準備などは、支援者として登録した会員の協力を得ながら行っている。現在、支援者には、男性 23 名、女性 10 名、計 33 名（令和元年）が登録をしており、これら支援者には活動の都度、賃金を支払っており、地元農家の雇用の場にもなっている。

第 2 図 保存会推進体制図

○ 特定非営利活動法人大山千枚田保存会の概要



その他、安房農業協同組合、一般社団法人鴨川市観光協会、鴨川温泉旅館業協同組合、商工会、NPO法人棚田ネットワーク、NPO法人千葉自然学校と事業連携している。

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

大山千枚田保存会は、全国に先駆けて実施した「オーナー制度（146組の参加）」を主な手段として、都市部の住民と交流（10,000人超）しながら、地域の農業者や女性等の人材を活用し、地域の貴重な資源である棚田や、周辺の遊休農地・竹林等の整備・保全を行っている。

また、古民家レストラン「ごんべい」にて地場産農産物の利用したメニューの提供や販売を行っており、約700万円を売上げるなど新たな販路の一つとなっている。

さらに、棚田や農村の多面的機能や、農村文化を伝えるために、小学生の体験宿泊学習（約5,600名参加：県外が約4割）や、関東圏内の大学と連携した「棚田環境大学（約100名参加）」等を開催するなど、若い世代に対する食料・農業・農村の学習の場としても貢献している。

これらの取組に加え、市や観光協会、旅館組合、商工会、地元住民と連携して、観光客が減少する冬季における観光誘致を図るため、「棚田の夜祭り実行委員会」を組織し、棚田の畦に3,000本の松明と10,000本のLEDライトを設置し、幻想的に棚田を彩るライトアップイベントを始めるなど、地域資源を有効活用した観光客の誘致に寄与している。

2. 農業生産面における特徴

（1）棚田オーナー制度等による都市農村交流の促進

棚田オーナー制度や棚田トラスト等各種制度を通じて、年間200組を超える会員と共に棚田の保全活動を実施しており、令和元年度の交流人口は10,000人を超えた。

また、大山千枚田3.2ha以外に、地権者が耕作不可能になった周辺の棚田地帯を、平成30年度には約2ha、令和2年度にはさらに2aを周辺住民が協力して再生するなど、耕作放棄地の増加に歯止めをかけている。

さらに、「家づくり体験塾」プロジェクトでは古民家の再生を通じて日本の伝統建築と国内産の木材の価値を見直し、森林の再生に寄与するために地元林業家、地元大工と連携しながら活動を行っている。

この活動は平成18年度から開始し、



写真1 棚田オーナーの田植え



写真2 家づくり体験塾

令和2年までに鴨川市を含む南房総圏内に13件物件を手掛け、移住者・二地域居住者の増加にも寄与している。

(2) 古民家レストランでの農産物加工品の販売

古民家レストラン「ごんべい」で、棚田で収穫された米等を活用したメニューを提供するとともに、ジャムや梅干し等、地元の農産加工品も販売しており、地域の農産物の販路の一つとなっており、女性の雇用の確保にもつながっている。



写真3 古民家レストラン

(3) 後継者の育成、確保

保存会の役員、支援者、事務局を対象に、定期的に体験インストラクターとしてのスキルアップ講座を開催し、活動の意義を再確認するとともに、人に伝えるための技術のレベルアップを図っている。

また、活動の後継者の育成として地域移住者への活動の参加を呼びかけ技術の継承を図っているほか、大山千枚田棚田オーナー制度参加者への農作業技術の普及も行っている。

(4) 指定棚田地域振興活動計画の推進

大山千枚田は令和2年5月に棚田地域振興法に基づく「指定棚田地域」に指定され、同年8月に「棚田地域振興活動計画」が認定され、計画では令和7年3月を目標に、棚田等の保全、活動を通じた多面的機能の維持・発揮、棚田を観光資源とした地域振興を行うこととしており、継続的な各種取組が期待される。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 小学生の宿泊体験活動の推進

平成21年度には、農村地域の魅力の発信や二地域居住者の受け入れを推進するために4軒の農家で農家民泊準備会が組織され、平成22年に県内初となる「鴨川市農家民泊組合」を設立した。

これにより、二地域居住希望者や学校体験受け入れの窓口を増やすこと



写真4 小学生の自然体験

ができた。令和元年度は、千葉県内外の小学生を中心とした宿泊学習として、112組、5,594名の受け入れを行った。

また、遊休農地を活用したビオトープ作りや、地域住民と棚田オーナーが共同で里山の生物調査や地質のガイドツアーを実施するなど、地域の自然環境の豊かさについて一般の方にも広く普及を行っている。

(2) 多様な団体と連携したコミュニティ活動の強化

行政、観光協会、商工会、旅館組合と連携し、棚田をライトアップする「棚田のあかり」や「棚田の夜祭り」等のイベントを開催し、観光客の誘致に寄与するとともに、棚田のライトアップでは、地元の竹を活用して竹灯籠を作成しており、荒廃した竹林の整備にも寄与している。



写真5 幻想的な棚田（松明）

また、さらに、関東10大学（法政大学、日本大学、東京農業大学等）の100名程度の学生と連携し「棚田環境大学」を毎年開催し、棚田や中山間地域でのワークショップ、荒廃した竹林の整備と再生、泥んこバレーボール等のイベントを実施している。

この他、一般カメラマンと連携し、写真コンテストを開催し、入賞作品を活用した「大山千枚田カレンダー」を作成し、大山千枚田のPR活動を行っている。

(3) 女性の経営参画、活躍

棚田における農作業体験活動のインストラクター（23名）や、農作業体験時の昼食の提供、古民家レストラン「ごんべい」のスタッフとして、保存会から現在10名の女性支援者が活躍している。



写真6 体験学習（祭り寿司づくり）

また、綿藍トラストや藍染体験の運営、事業のレベルアップなどは女性の視点から積極的に意見をだしてもらい、よりよい活動になるよう努めている。

さらに、女性の支援者の代表が理事として経営に参画している。様々な企画をする企画委員会にも女性理事がおり、運営に関わっている。